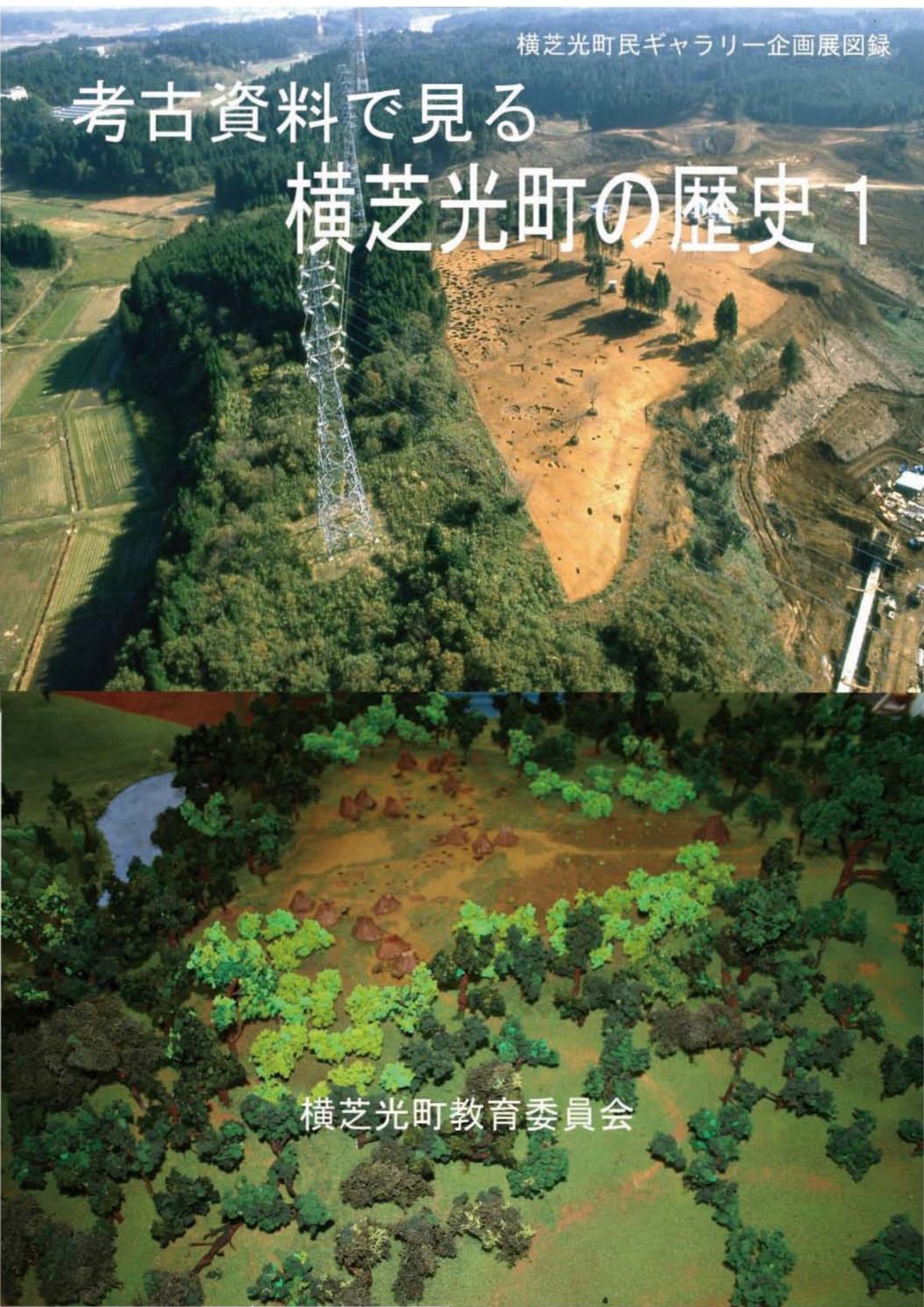
横芝光町民ギャラリー企画展図録

考古資料で見る
横芝光町の歴史1



横芝光町教育委員会

あいさつ

横芝光町は、南を黒潮が洗う太平洋に、水田が広がる九十九里平野、北部は下総台地の緑濃い里山がアクセントとなり、町の中央をゆったりと栗山川が流れ、文字通り山紫水明の地と言えます。この豊かな土地には、古くから人々が住み、様々な営みや文化が育まれてきました。その土地の歴史を知ることは、自分たちの足元を見つめ直し、この地に愛着を持つきっかけとなることでしょう。

「考古資料で見る横芝光町の歴史１」は、人類がこの地に初めて足跡をしるした３万年前の旧石器時代から、稲作が始まる前までの、長い時代を取り上げました。この時代は、新人類が世界に広がり、日本にもその足跡をしるした頃から、寒い氷河時代が終わり、温暖になって縄文文化が花開いた時になります。町内にも、この３万年前の日本旧石器時代の初めから縄文時代終末までの遺跡が、多数分布しています。これは遺跡が発掘調査され、出土した考古資料によって明らかとなった成果であります。

町内では、これまでに考古学史に残る姥山貝塚や殿塚・姫塚古墳を初め、多くの遺跡が発掘され、多くの貴重な考古資料が出土しました。それらのほとんどは町に保管されていますが、中には他の博物館や大学などに保管されている資料もあります。今、町にはそれらの考古資料を常に公開活用する場がなく、わずかにほんの一部を町民会館等で展示しているのみです。これではなかなか町の古い歴史を知ることは難しいと思われます。そこで町民ギャラリーで、古い時代から順を追って、毎年この時期に「考古資料で見る横芝光町の歴史」展を開催し、町内の遺跡から出土した考古資料を展示し、発掘調査で得られた成果を公表することにしました。これでもまだ全体の一部ですが、多くの方にご覧頂き、町の歴史について関心を持っていただければと思います。

目　　次

あいさつ
目次　例言
年表　1
1．町の自然環境
（1）大地の成り立ち　2
（2）山（台地）の地形　4
（3）平野（低地）の地形　6
2．旧石器・縄文時代の遺跡・遺物
（1）遺跡のあり方　8
（2）旧石器時代
①旧石器時代とは　9
②町の旧石器時代遺跡　11
鍛冶屋台遺跡　寺方遺跡　宮ノ前遺跡　遠山天ノ作遺跡
木戸台遺跡　篠本　傍示戸遺跡　北長山野遺跡
③旧石器時代の風景　16
④旧石器時代の生活　17
（3）縄文時代
①縄文時代とは　18
②縄文土器のいろいろ　18
③各時期の遺跡・遺構・遺物　20
草創期　早期　前期　中期　後期　晩期
④貝塚文化が栄えた頃　35
⑤縄文人の生活　37
⑥低地に進出した縄文人　39
（4）黒曜石の産地分析　40
参考文献　協力者　42

例言

本書は、平成24年9月15日から11月11日まで、町民ギャラリーで開催された「考古資料で見る横芝光町の歴史」展の図録である。

掲載した写真・図等のほとんどは町保管のもの、及び新たに撮影したものであるが、一部多古町教育委員会から提供頂いたものもある。

図録の執筆・編集は横芝光町教育委員会社会文化課生涯学習班文化財担当道澤　明が当たった。

横芝光町の歴史年表（旧石器時代～縄文時代）

| 時代 | 原始 | | |

1．町の自然環境

（1） 大地の成り立ち

横芝光町は、千葉県の東部、太平洋の波が洗う九十九里浜の中ほどにあり、温暖で緑豊かな農村風景が広がる所です。その町の大地は大きく二つに分けられ、北西部に分布する緑濃い高台と、南東部では海岸に沿って広がる平坦な低地とからなっています。高台は下総台地と呼ばれ、千葉県の北半分を占める広大な地形で、低地は九十九里浜の名を取って、九十九里平野と呼ばれています。

太平洋から見た町

下総台地は、今から40万年前くらいから海に堆積した砂の層と、その上に赤土と呼ばれる火山灰起源の関東ローム層が堆積し、その後の地盤の隆起や海面の低下などの変化と、河川等の浸食によって、今のような地形になっています。

ところが町内ではもっと古い地層が現れている所があります。通称古川石合の岩礁と言われる小高い丘と、その南側の浅間神社のある丘です。また、石合の県道を挟んだ西側にも、同じ岩山が見られます。最近、坂田城跡の下でも同じ地層があることが分かりました。これらの岩は砂が固まって出来た層で、よく見ると所々貝化石を含んでいます。この層は今から300万年ほど前に堆積した上総層群最下層の黒滝層に相当すると思われ、房総半島の勝浦市や君津市などに見られ、山武市の浪切不動院下や同市早船の岩も同様と考えられます。貝化石にはカキやカガミガイなどの浅海性の種類が見られます。この砂岩層がなぜこの地域に分布するのか、どのくらい古い層なのか、未だによく分かっていいない所が多く、今後の研究の課題です。

台地と低地とが織りなす町中央部（長倉）

古川石合の岩礁

本町八坂神社境内にある岩

下総層群と
上総層群との境

母子と小田部の間の切り通し

母子から小田部へ抜ける道の切り通しは、今でこそ草で覆われていますが、工事で削った時はきれいに地層が現れていました。その下半分は白っぽい灰青色で硬くなった泥層で、上の層とは明確な堺を示していました。これは上総層群最上層の金剛地層に相当し、山武市から南に見られます。

中台の台地を構成する地層

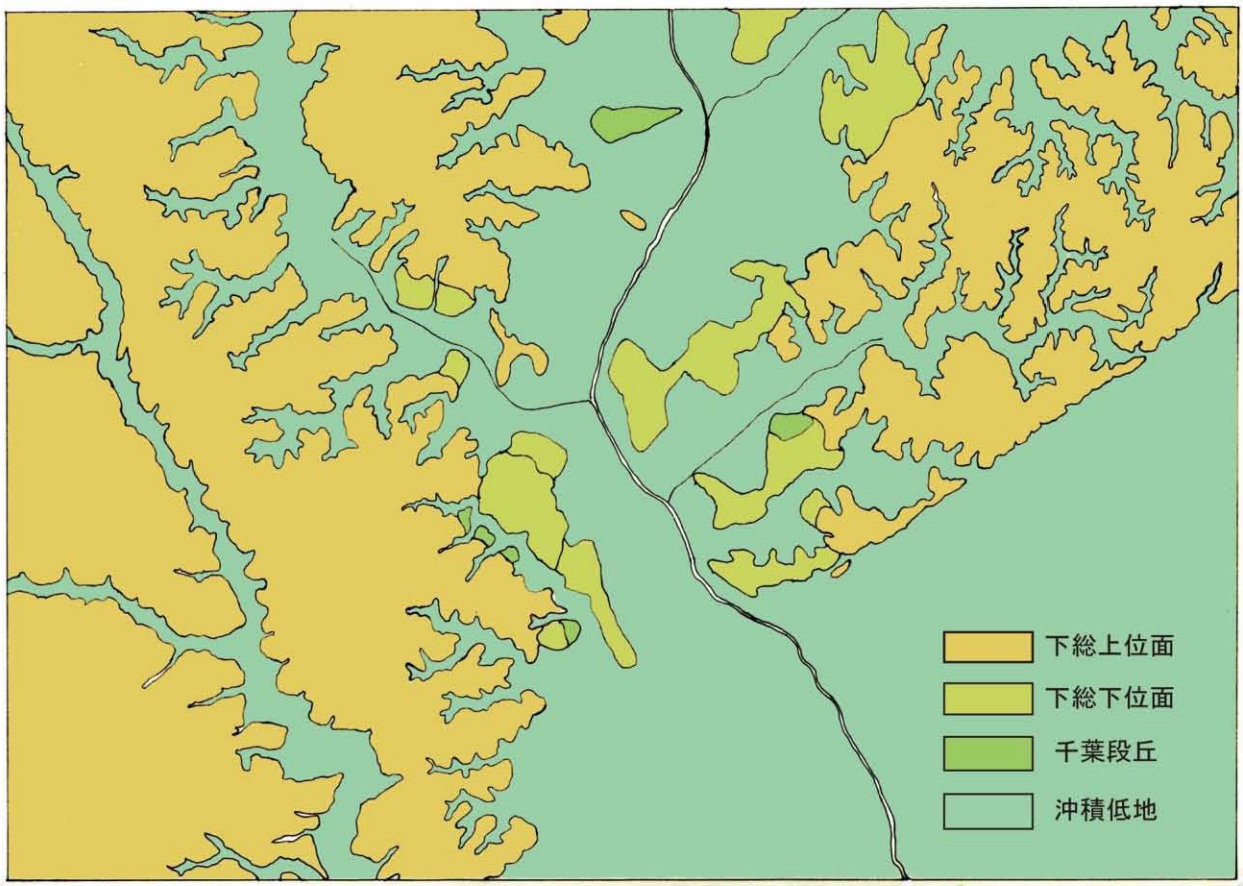
上総層群の上には、下総層群と呼ばれる下総台地を構成する地層が堆積しています。中台の崖の写真では、下から上泉層、清川層、木下層などの、柔らかい砂の層が見られます。これらの層からは、よく貝や象などの化石が産出され、町内からもナウマン象の牙の化石が出たという記録があります。

（2）山（台地）の地形

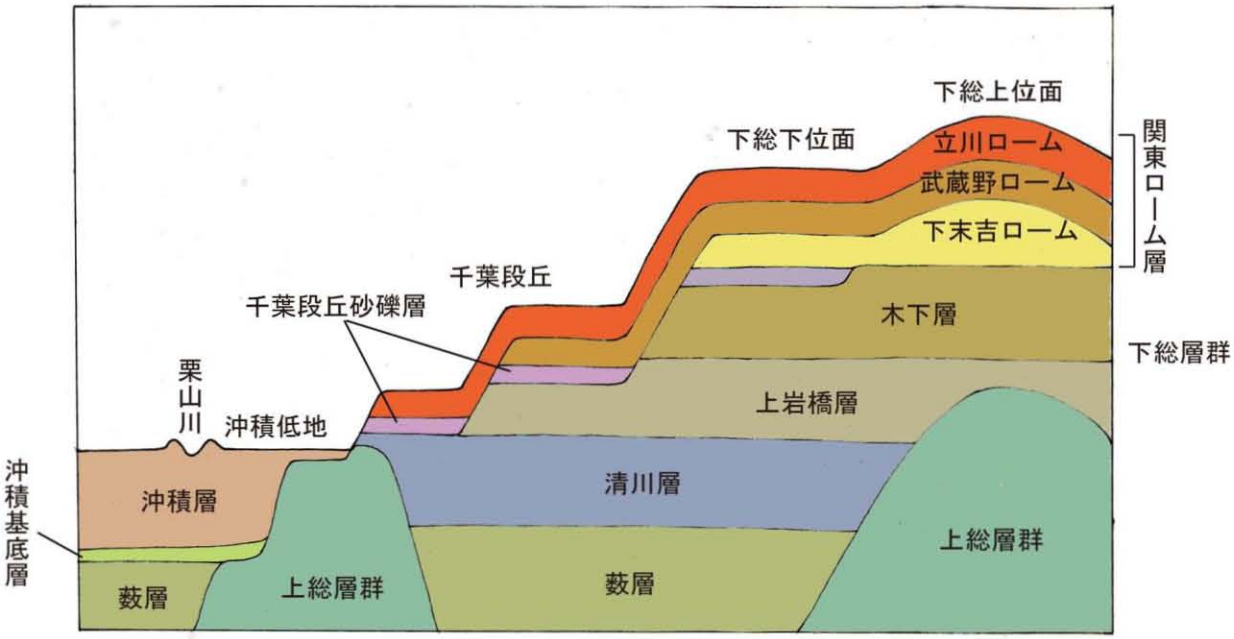
町の北西部に分布する台地をよく見ると、平らな畑が広がっている所と、谷が深く入り込んで起伏が大きい所とがあります。また、低くなっている台地も見られます。このように同じ台地なのに、様々な地形を示すのは、台地の出来方に違いがあるからです。それは台地が出来て古くなるほど浸食が進みます。また、台地は河野浸食と土砂の堆積とによって新しく出来ます。それによって、下の図のようにいくつかの種類の台地が町の中に分布していることが分かりました。

最も古い下総上位面は、下総台地の大部分を占め、浸食が進み谷が深く入って、丘陵のようになっています。標高は高い所で40mを超えます。少し低い下総下位面は栗山川流域に分布し、台地上は平らな畑が広がり、台地の周りはあまり谷が入っていません。標高は少し低い35mほどです。千葉段丘は東西に走る谷の南側に分布し、町内では小川代と長倉に見られます。標高は20m以下になります。

このような台地には、赤土と呼ばれる関東ローム層や、かつての海に積った砂層が重なっています。下総上位面の台地には、砂層の下総層群（木下層、上岩橋層、清川層、薮層）の上に、関東ローム層（下末吉ローム、武蔵のローム、立川ローム）が堆積しています。下総下位面では木下層を削って堆積する常総層に、関東ローム層が載っています。千葉段丘の台地は、千葉段丘砂礫層が台地を削って堆積し、その上に関東ローム層の武蔵野・立川ローム層が堆積しています。この地形の形成と、堆積する地層との関係を示したのが、次の図です。



下総台地の地形面区分



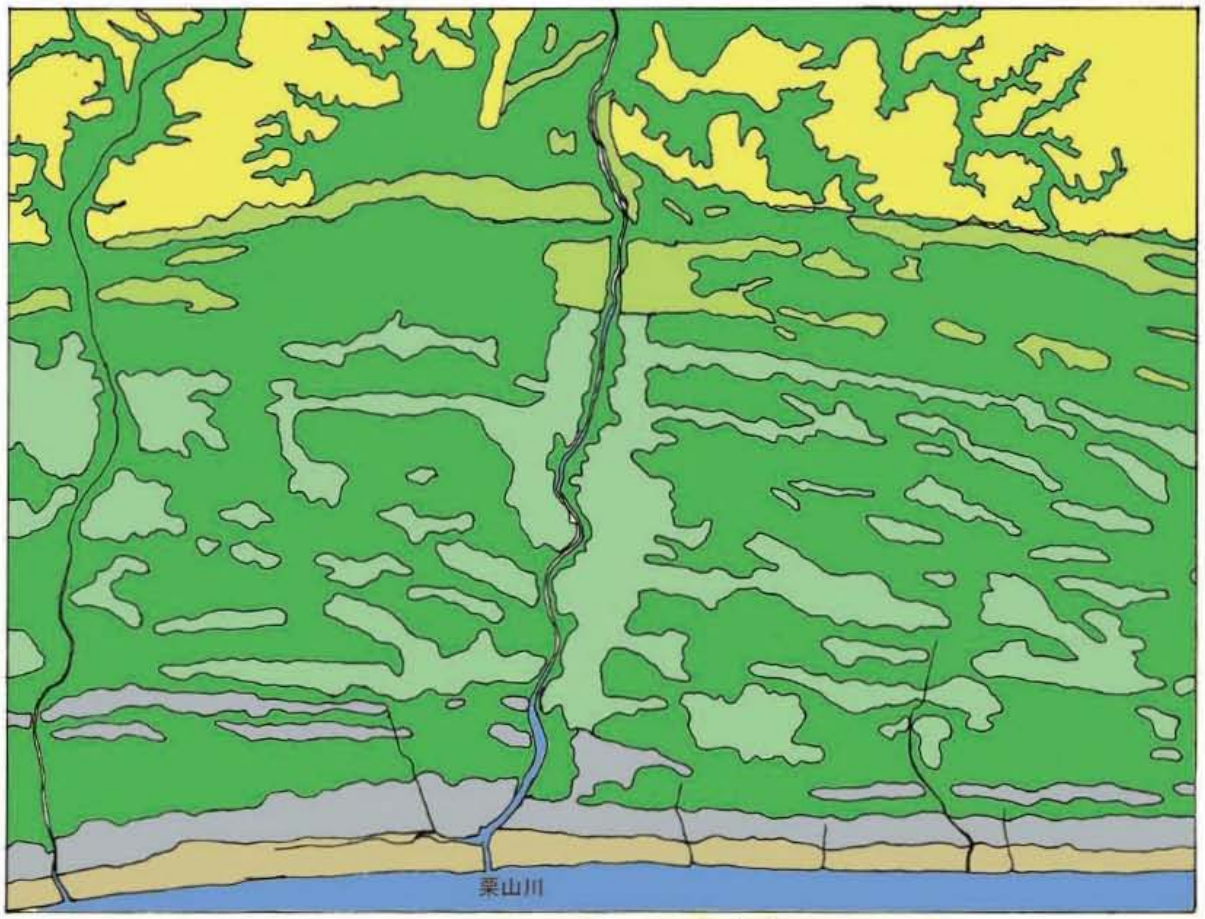
横芝光町の地形と地層断面模式図

空中写真で見た台地の姿（南北に走る線は栗山川）

(3) 平野（低地）の地形

平野は町の南東部を占める九十九里平野と、北西部の台地の間に入る谷津とがあます。九十九里平野は太平洋の波が洗う九十九里浜に沿うように、北の飯岡から南の一宮まで延びる海岸平野です。その形成は今から１万年前以降の海面上昇（縄文海進と呼ばれる）で、海面より低かった所に海流で運ばれた土砂が堆積してできたと言われます。また、台地の間に入る谷津は、河川が運んだ土砂の堆積によって出来ていて、海岸平野と共に最終氷河期以降の温暖期（地質年代では沖積世あるいは完新世と言う）に形成されたことから沖積平野とも呼ばれています。九十九里平野は形成される過程で、海岸の砂堤（砂州）と後背湿地とが交互に並び、平坦ながらも砂堤の少し高い微高地と低（後背）湿地とからなっています。今日では微高地は集落や畑に、低湿地は水田や沼沢地となっていて、土地の利用の違いで一目で分かります。また、栗山川流域には、風によって形成された砂丘も見られます。

九十九里平野の形成年代については、そこに分布する遺跡の年代の違いによって分かってきました。砂州の上に営まれた芝崎遺跡や中島遺跡、栗山庚申塚遺跡からは縄文土器が出土していますが、屋形粉豆遺跡では平安時代の土器しか出ませんでした。また、台地や第1砂堤列の間にある低地では泥炭層がよく発達していて、その中から縄文時代の丸木舟が多く出土しました。このように遺跡から見た九十九里平野の形成は、縄文時代中ごろまでは第1砂堤列、平安時代には第2砂堤列、そして鎌倉時代頃にはほぼ今と同じになっていたと思われることが分かりました。



九十九里平野の地形区分

台地
第１砂堤列
第２砂堤列
第３砂堤列
後背湿地
現砂浜

九十九里平野と栗山川の淵に営まれた芝崎遺跡

細長く形成された砂州上の中島遺跡

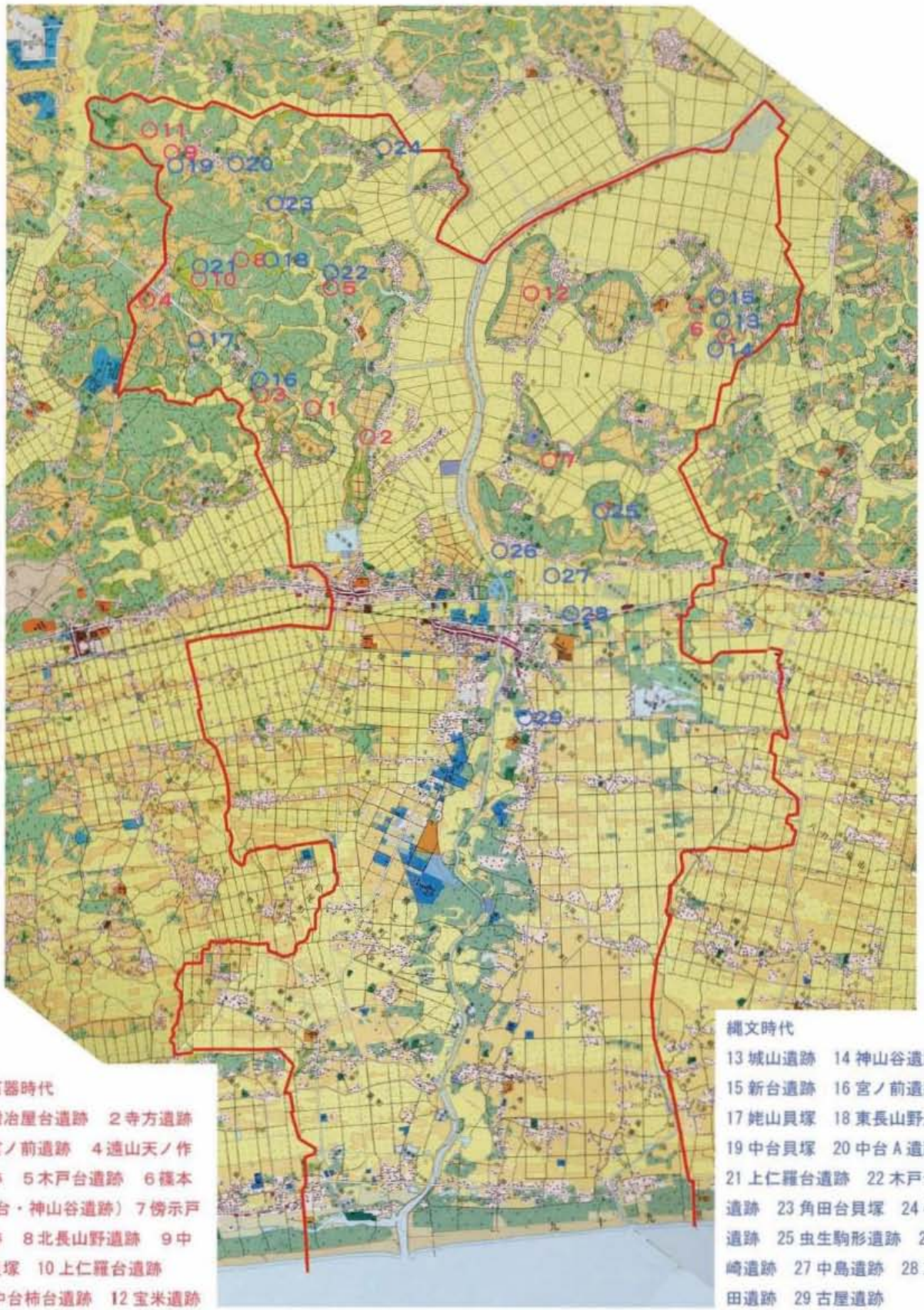
水田の下に堆積する泥炭層
（中島遺跡）

ハスが繁茂する乾草沼

2．旧石器・縄文時代の遺跡

(1) 遺跡分布

横芝光町の旧石器・縄文時代の遺跡は、そのほとんどが北西部にある台地上に分布するが、一部は九十九里平野の低地にも縄文時代遺跡がある。また、過去の事例でも栗山川流域で、独木舟や木製品が出土した記録がある。下の図は、赤が旧石器時代、青が縄文時代の遺跡である。



横芝光町の旧石器・縄文時代遺跡

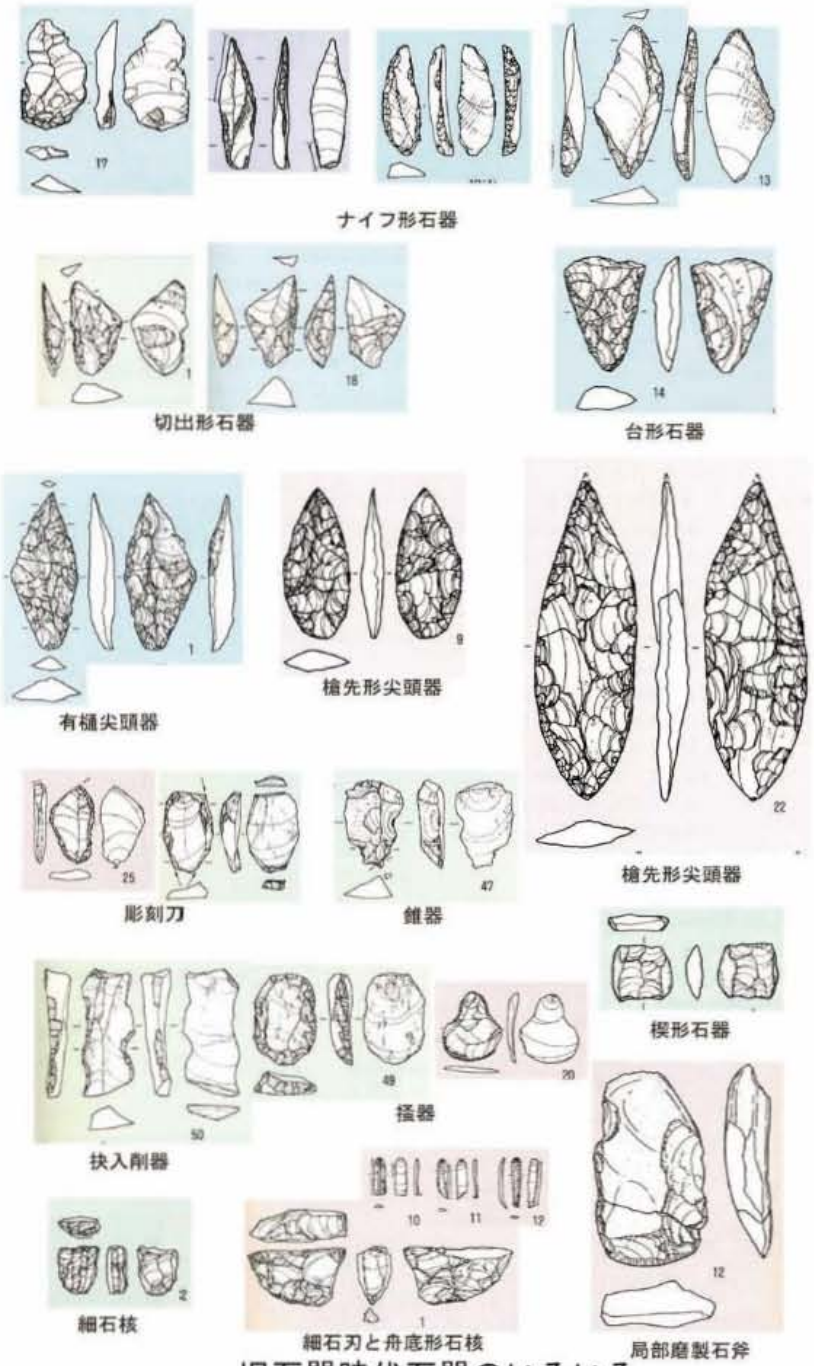
(2) 旧石器時代

① 旧石器時代とは

旧石器時代は、今から１万年以上前の、人類がまだ石のみを割って道具としていた時代で、数十万年という長い時間を、人類は少しずつ進化してきた。日本に初めて人類が足跡をしるしたのは、４万年前頃と言われ、千葉では３万年前には既に多くの遺跡や石器が残されています。その３万年前から１万年前までを後期旧石器時代と呼ばれ、人類は新人が世界に広がったとともに、最終氷河時代で最も寒かった時代でもあります。そのため人類は生きるため、様々な工夫をし、急速に進化して行きました。そこで作られた石器は様々な形のものがあり、突くものから飛ばすものへと発達させ、来る縄文時代の礎を築いていきました。下の図は、旧石器時代の代表的な石器で、時期によって現れたり消え、また形も変化していきました。

千葉県の旧石器時代の石器は、ほとんど赤土と呼ばれる関東ローム層から出土します。下の写真は町内の遺跡のローム層断面で、武蔵野ロームの上、厚さ２mの中から出土します。

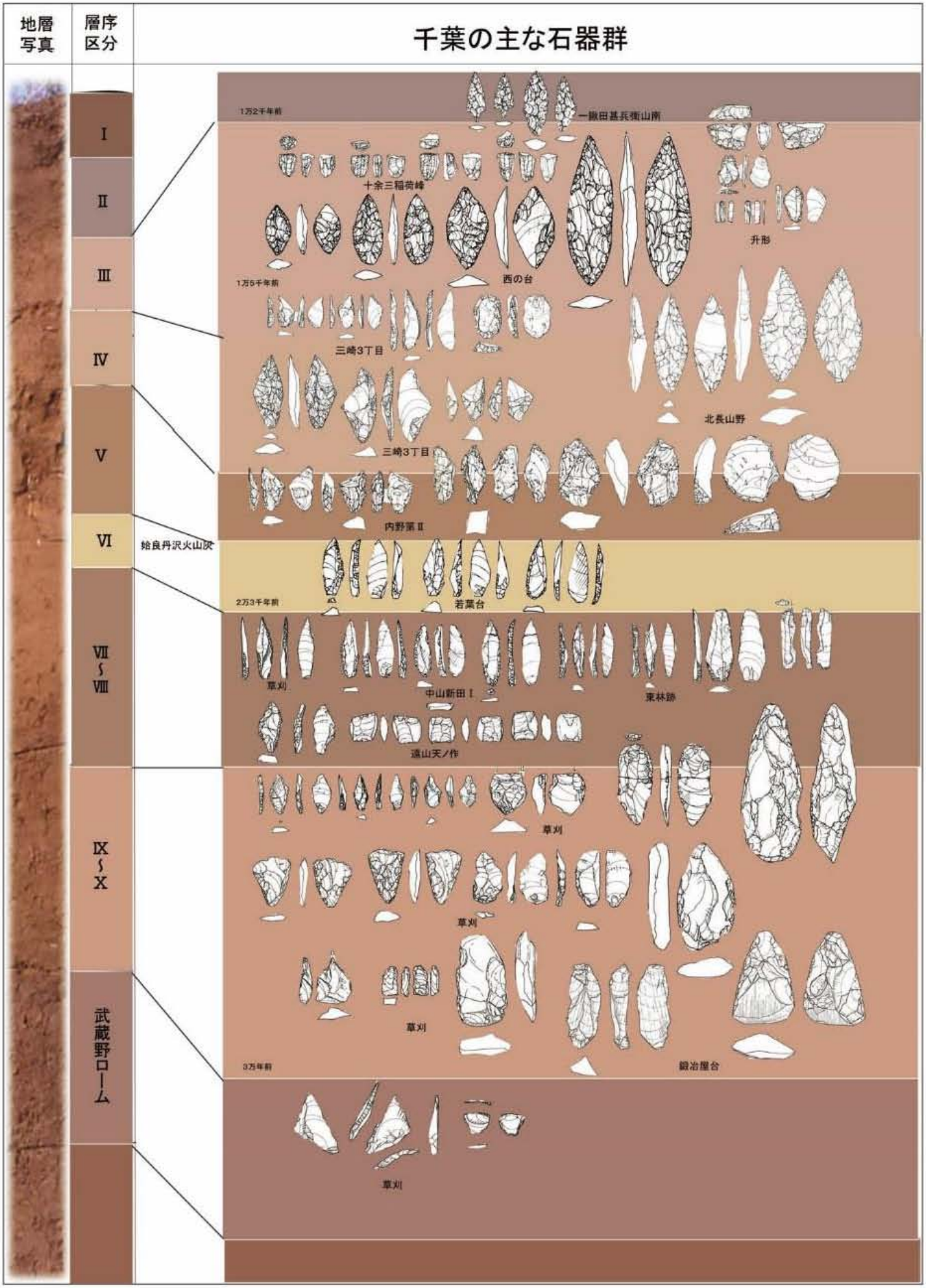
次のページは、その層と対比した千葉県の旧石器の変遷を示したものです。



旧石器時代石器のいろいろ

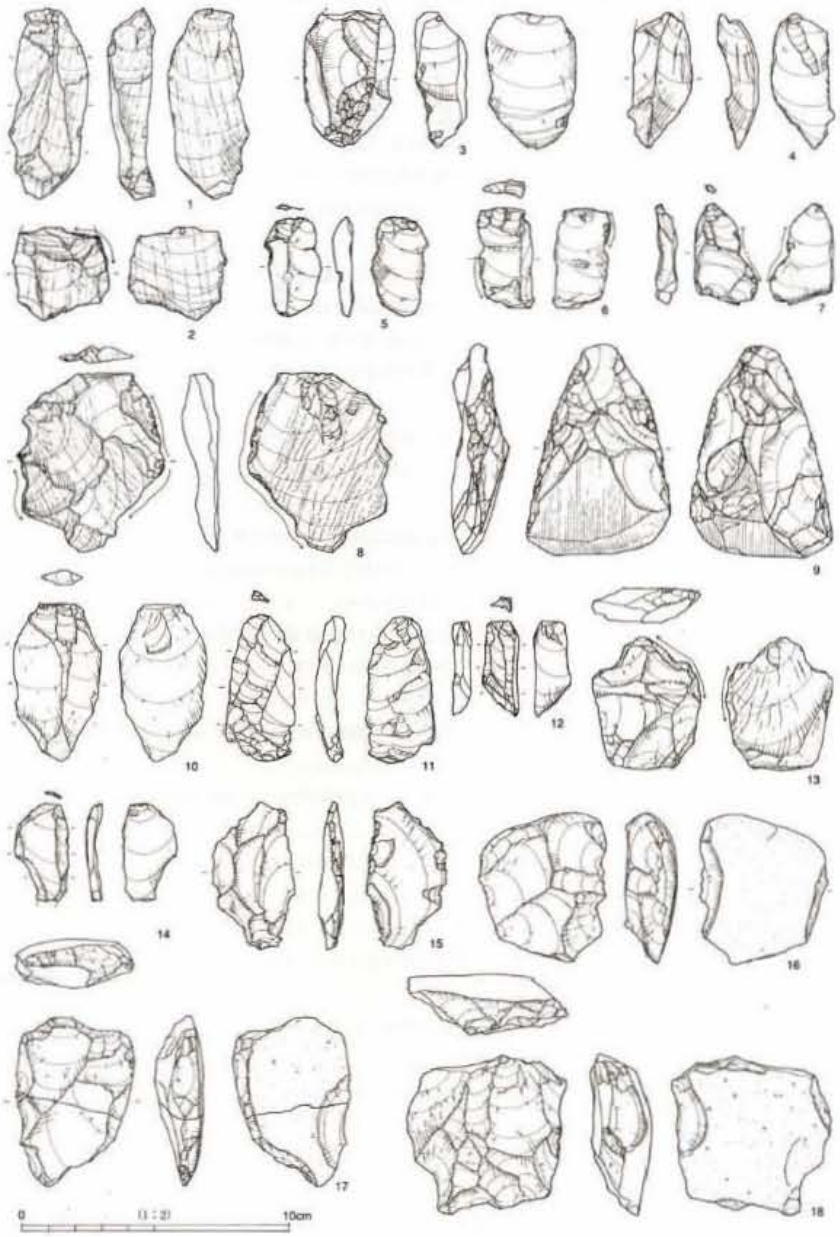
町内の関東ローム層序

旧石器時代石器の変遷


地層写真
層序区分
千葉の主な石器群
I
II
III
IV
V
VI
VII～VIII
IX～X
武蔵野ローム
1万2千年前
一鍬田甚兵衛山南
十余三稲荷峰
升形
1万5千年前
西の台
三崎3丁目
北長山野
三崎3丁目
内野第II
姶良丹沢火山灰
2万3千年前
若葉台
草刈
中山新田I
東林跡
遠山天ノ作
草刈
草刈
草刈
3万年前
鍛冶屋台
草刈

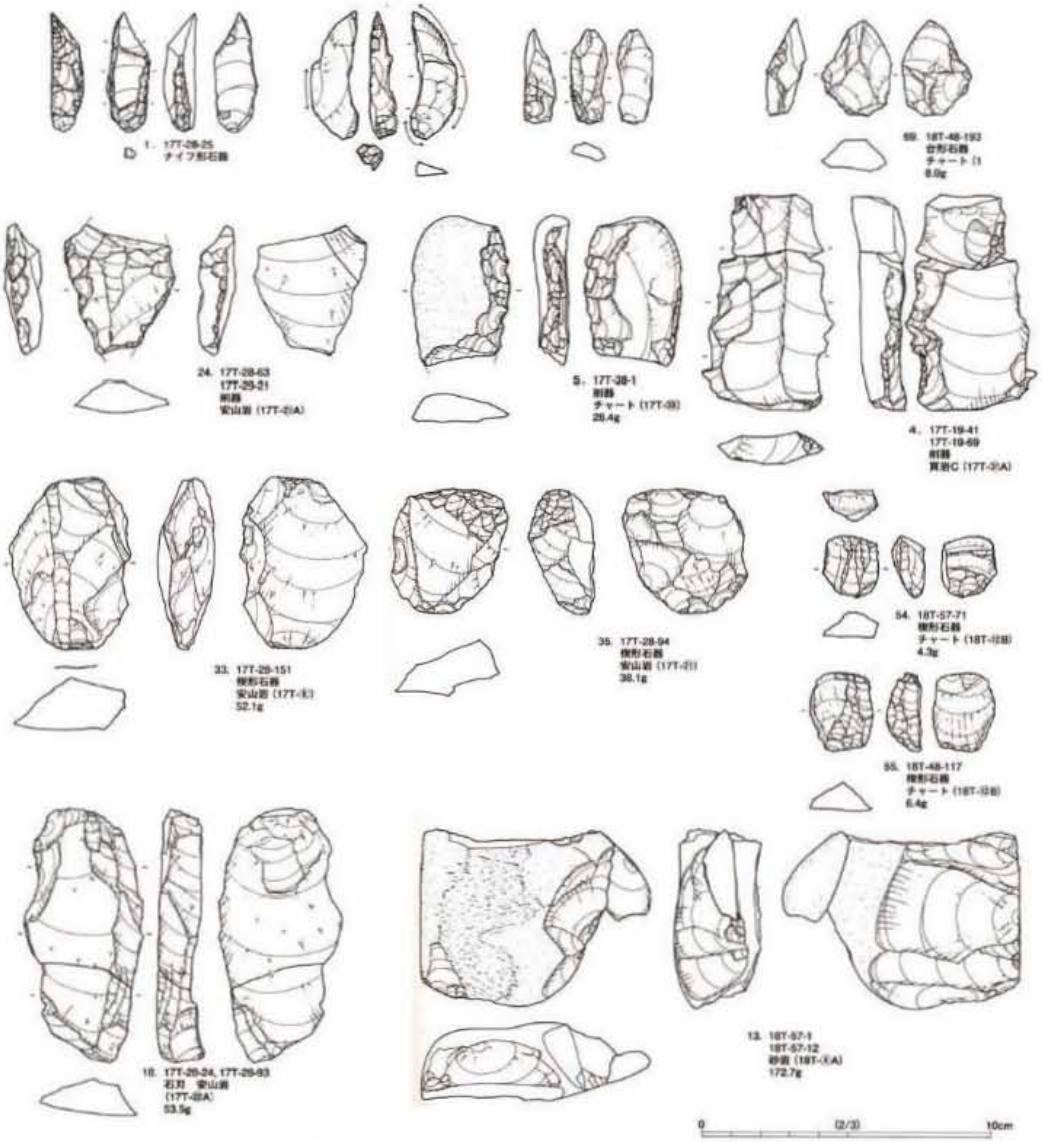
②町の旧石器時代遺跡

鍛冶屋台遺跡出土石器



鍛治屋台遺跡出土石器実測図

寺方遺跡出土の石器



寺方遺跡出土の石器実測図

寺方遺跡

寺方遺跡は、坂田城跡がある標高35mを測る細長い台地の付け根にあり、調査は細長い台地のくびれ部が行われ、3箇所の遺物集中地点が検出された。遺物の出土層位はⅦ～Ⅸ層で、石器はナイフ形石器のほか、楔形石器と石刃が多く出土した。石材はチャートと安山岩が卓越する。

寺方遺跡

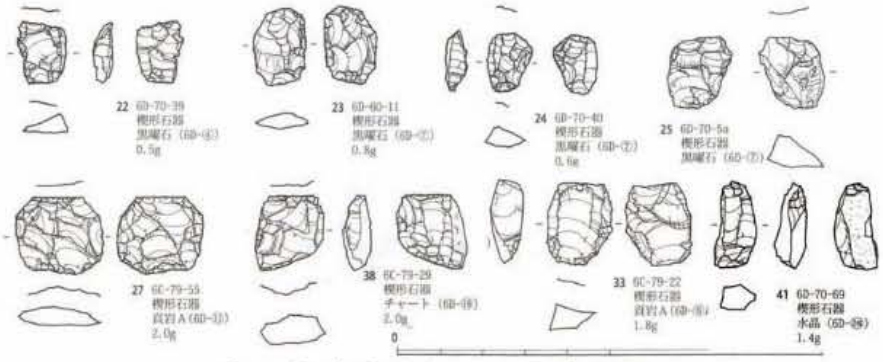
寺方遺跡出土の台石

宮ノ前遺跡

宮ノ前遺跡は、鍛冶屋台遺跡のある台地の谷を隔てた西側にあり、標高35mを測る。遺物集中地点は2箇所で、出土層位はⅦ層に当たる。石器は楔形石器のほかは小剥片で、石材は黒曜石、頁岩、水晶がある。

宮ノ前遺跡

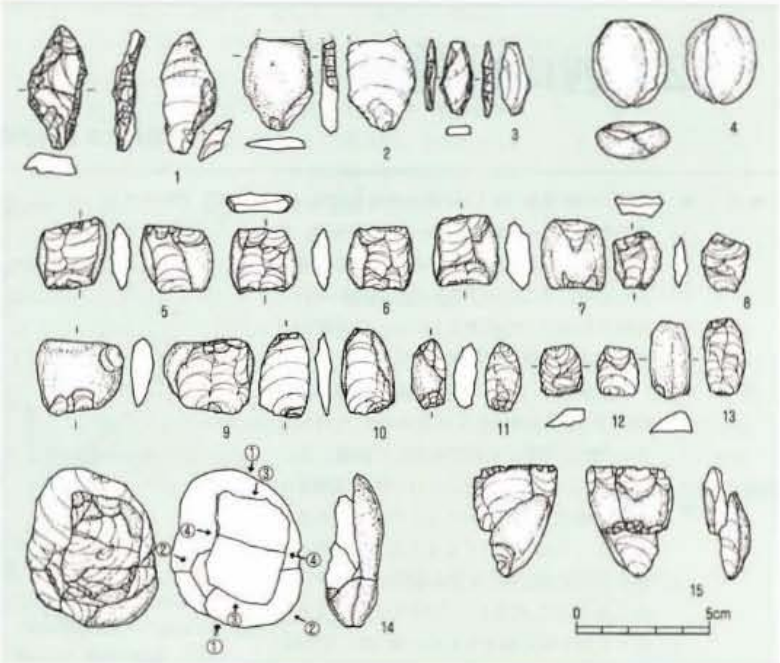
宮ノ前遺跡出土の石器



宮ノ前遺跡出土の石器実測図

遠山天ノ作遺跡

遠山天ノ作遺跡は、成田から松尾に延びる台地の稜線上にあり、標高43mを測る。遺物集中地点は、7箇所あり、出土層位はⅦ層下位である。石器はナイフ形石器のほか、小円礫を素材にした楔形石器が多く出土した。



遠山天ノ作遺跡出土の石器（千葉県の歴史より）

篠本

篠本では夏台と神山谷遺跡で、旧石器が出土した。いずれもⅦ層の石刃である。

夏台遺跡出土の石刃

神山谷遺跡出土の石刃

傍示戸遺跡

傍示戸遺跡は、栗山川左岸の台地上にあり、標高 37m を測る。旧石器は石刃が３点出土した。

傍示戸遺跡出土の石器

北長山野遺跡

北長山野遺跡は、長倉と中台が接する台地の中にあり、標高 43m を測る平坦面の少ない丘陵状の台地に立地する。遺物集中地点は１箇所である。出土層位はⅣ層で、有樋尖頭器と剥片、石核などがあり、石材は尖頭器が硬質頁岩であるほかは瑪瑙である。このほか単独で角錘状石器が出土している。

北長山野遺跡出土の石器

氷河時代最終氷期の横芝光町の風景

③ 旧石器時代の風景

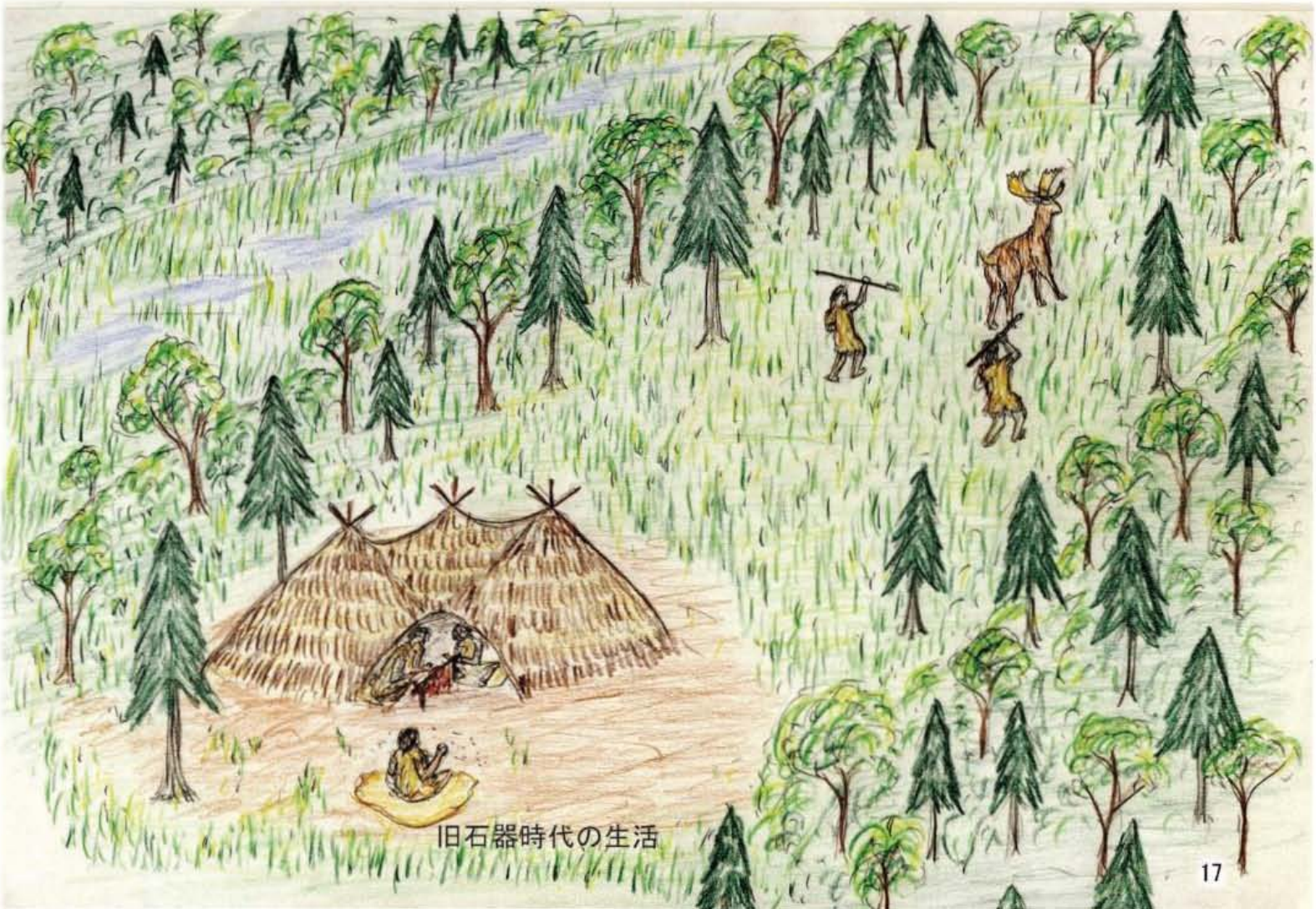
この時代は氷河時代とも呼ばれ、特に今から３～２万年前頃は最終氷期の最も寒かった時で、北欧やカナダには大陸氷河が発達して、海の水の多くがそこに堆積し、海面が今より100m以上も下がったと言われています。その頃の町の光景を想像して描いたのが下の図です。気温は今より年平均で６～７度低く、今の北海道のような気候で、山にはトドマツやトウヒなどの針葉樹や、ブナやミズナラなどの広葉樹などの森林であったと思われます。その森にはオオツノジカが棲み、それを旧石器人たちは狩猟していたと想像されます。九十九里平野の下は海が次第に低下していくにしたがって、図のように海岸段丘が形成されていたと思われます。そうした低地には草原や湿地が広がり、ハシバミが生え、シカやヤギュウたちのいい生活の場となっていたことが考えられます。隣町の多古町志摩では、オオツノジカの化石が出土しています。旧石器人はこうした動物や木の実を採って、生活していたと考えられています。

ハシバミ

④ 旧石器時代の生活

今から3万年前から1万年前の後期旧石器時代は、今よりも6～7度も気温が低い寒冷な氷河時代であったことは、その時代の地層から出てきた植物化石によってわかっています。多古町の志摩でもオオツノジカの化石骨が発見されています。このように寒い時でも人間はたくましく生活していたことが、多くの遺跡やそこから見つかっている石器などからも想像できます。この時代は人間が使う道具は石器しか残ってなく、その石器はナイフ形石器や槍先形石器などするどい形で、縄文時代の矢じりから比べると大きいものでした。これはオオツノシカのような大型の動物をとるためとも考えられています。また、町内の遺跡からは、形が四角で向かい合う両端から割った痕のある石器が多数出土していて、楔のかたちをしている楔形石器と呼ばれます。この石器は山武郡や香取郡などの県内東部に多く分布し、地域的に特徴のあるものといえます。楔形石器は日本の後期旧石器時代の前半（2万4千年前）の石器ですが、後半になると槍先形石器が増えてきます。町内では北長山野遺跡から、片方のふちに先端から割った痕のある石器―有樋尖頭器が、２点出土しています。

日本では１万４千年くらい前になると、次第に温暖になり始め、石器が槍先形尖頭器と呼ばれる大形の石器が作られ、それに伴って土器が作られ始めたと言われます。その頃から縄文草創期が始まったと言われ、１万２千年前頃になると、石器は一転小型化して、鏃(やじり)のような有舌尖頭器という石器に変わり、旧石器らしくない石器になり、長かった旧石器時代は終わりを迎え、温暖化による縄文海進で、縄文時代の特徴である貝塚文化が始まります。



旧石器時代の生活

(3) 縄文時代

① 縄文時代とは

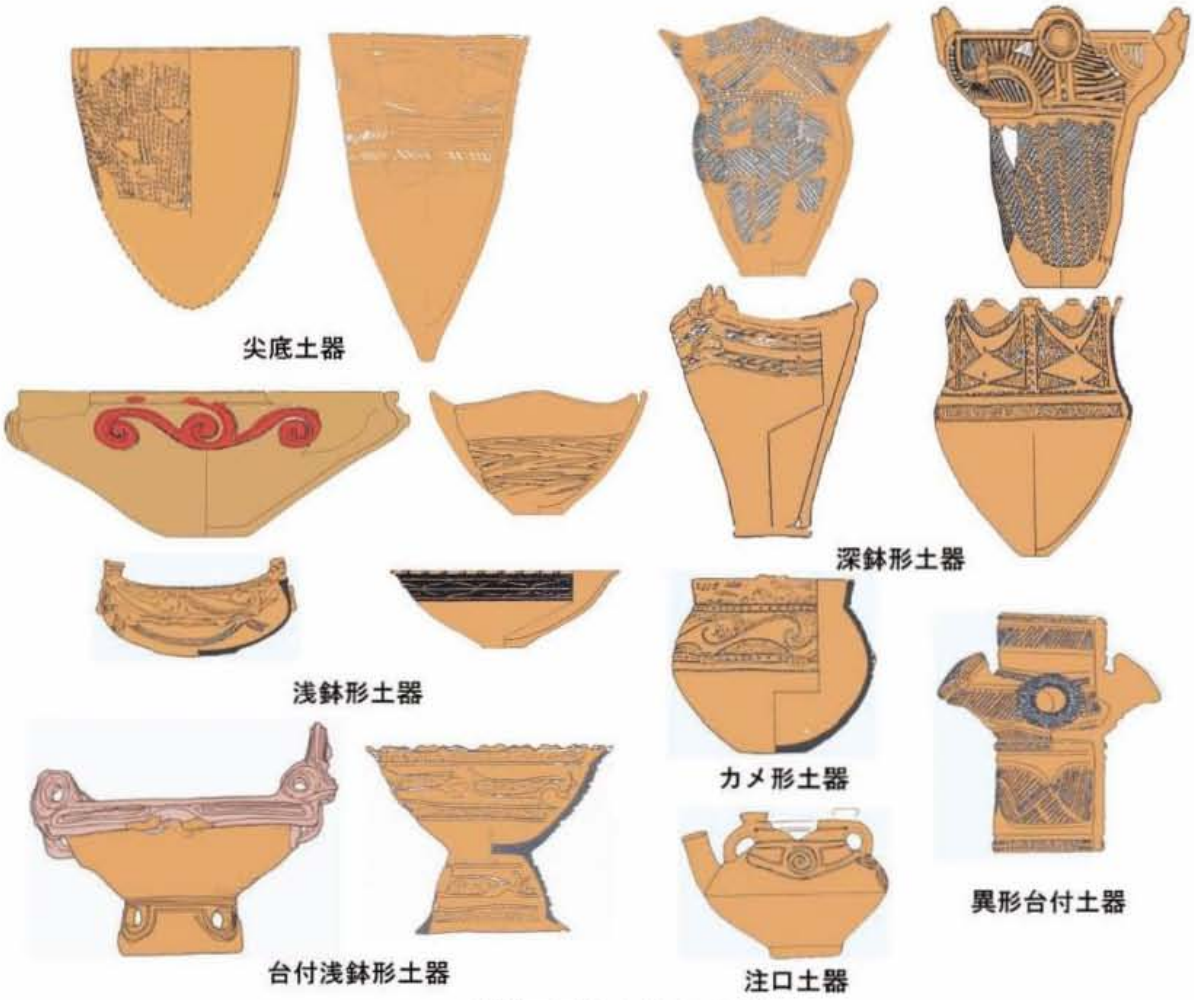
縄文時代とは、旧石器時代が終わり、主に縄目紋様を付けた縄文土器を作った時代で、稲作が始まって壺などの縄文土器とは全く違う土器を作り始めるまでの、約1万年続いた日本の原始時代の一時期です。海岸周辺では貝塚が営まれ、縄文文化を貝塚文化とも言われますが、長野県等の山間部にも多くの遺跡が営まれ、多様な縄文文化が発展し、また長く続いたことは、その当時の日本の気候が温暖で豊かであったと言われています。

千葉県内にも縄文草創期から多くの遺跡が営まれ、また日本で最も多く貝塚があることは有名です。町内でも有名な姥山貝塚を初め、多くの縄文時代遺跡があり、縄文文化がこの地にも花開いたことを示しています。

② 縄文土器のいろいろ

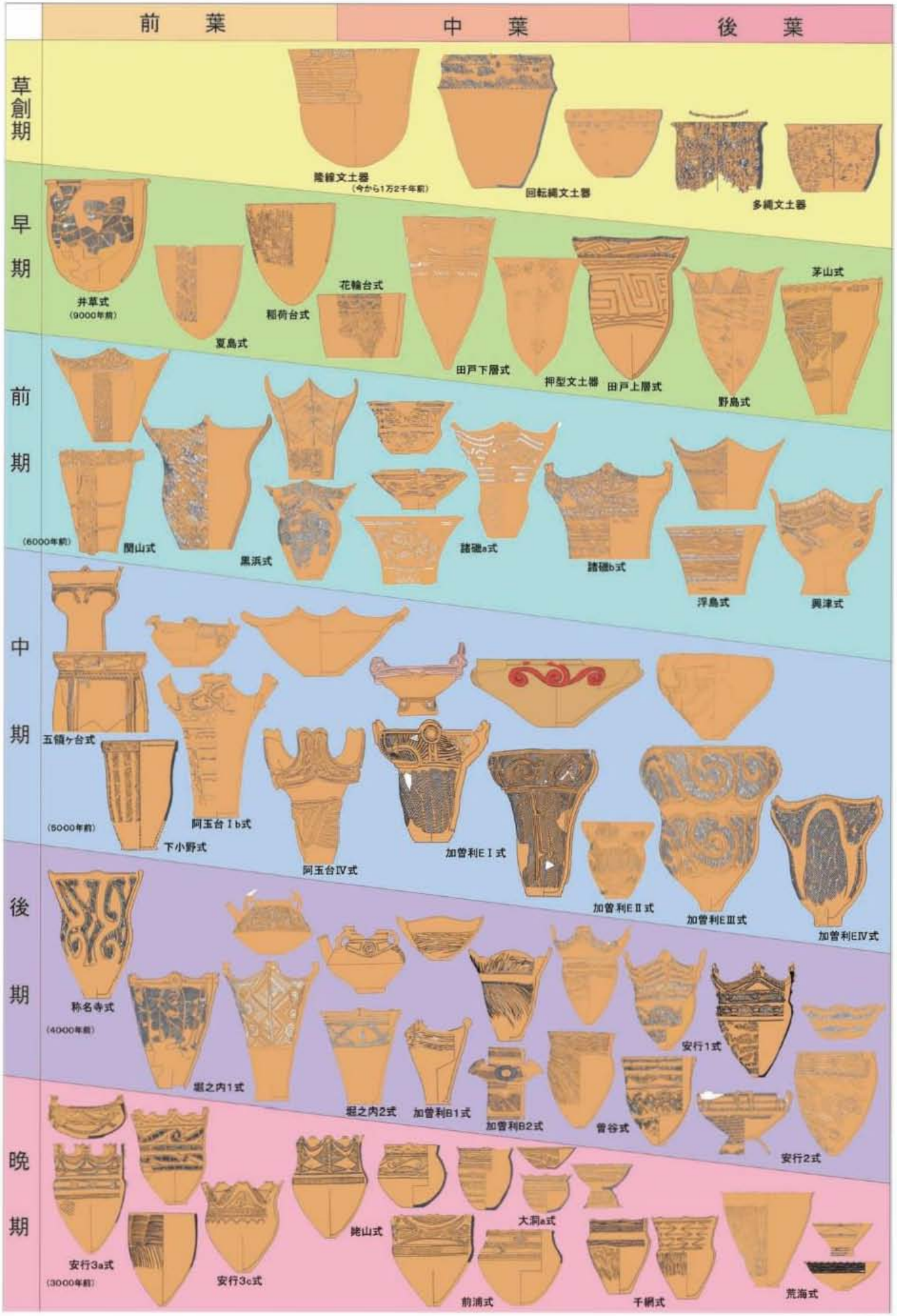
約1万年続いた縄文時代には、その時々、また各地でそれぞれ異なったさまざまな土器が作られました。草創期や早期では、底が丸まっていたり、尖っている土器があり、今日の常識ではどうやって置くのだろうと考えてしまいます。これは土器を作り始めた頃は、袋やドングリの形を模して作ったろうと言われています。また、底が尖っているのは、地面に少し穴を掘って突刺した方が安定するからと思われます。そのような土器(尖底土器)を遣っていたのは、まだ遊動生活をして定住していなかったからと推定されています。

それが住居を造り、定住するようになると、土器を置く床が硬く平らになると、尖底では不都合となって、底が平らになり、また様々な用途が生まれ、いろいろなモチーフが考え出され、様々な土器が作られていったと思われます。



縄文土器の色々な形

縄文土器のいろいろ（主に県内出土の縄文土器の変遷）



③各時期の遺跡・遺構・遺物

最古の縄文土器（草創期）

城山遺跡出土の土器・石器

町内からは縄文時代のもっとも古い草創期と呼ばれる、今から１万４千～１万年前の時期の、土器や石器が出土しています。写真の左２点は有舌尖頭器と呼ばれる槍先か矢の先に着けた石器で、旧石器時代から縄文時代への変化の過程にあるものといえます。右の土器片は、同じころ初めて縄目文様が付けられた土器で、表面だけでなく裏面にも縄目文様が付けられているので多縄文土器と言われ、この時期の土器の特徴です。

早期

１万～７千年前の縄文時代早期になると、遺跡からは住居跡のほかに、落とし穴がよく見つかります。篠本の神山谷遺跡からは径３m、深さ３mの大きな落とし穴が見つかりました。なぜゾウでも落ちそうな大きな穴に、シカやイノシシなどを追い落して捕ったのか、縄文人のエネルギーが感じられます。

縄文時代早期の土器になると、縄目文様のほか、ヘラで線を描いたり、貝殻を使って描いた文様の土器が出てきます。この時期の土器の形は、底部が丸かったり尖っているところから尖底土器と呼ばれ、これは土器を柔らかい地面に突き立てた方が安定したからと考えられます。縄文時代早期は３千年と長く続いたところから、作られた土器は形の変化こそ少ないですが、文様が大きく変化しました。初めは縄や紐をさまざまに使って、いろいろな縄目文様が付けられ、まさに縄文土器と言えました。また城山遺跡では縄目文様土器の地域色ある土器が、多量に出土しました。次にヘラで線描きした文様の沈線文土器が続き、その次には赤貝類の貝で器面を飾った条痕文土器と呼ばれる土器が作られました。これらも町内から出土しています。

早期の住居跡（神山谷遺跡）

早期の炉穴（神山谷遺跡）

早期の落とし穴（神山谷遺跡）

宮ノ前遺跡

宮ノ前遺跡からは、早期の土器片が50点出土した。撚糸文系土器と呼ばれる一群で、最も古い井草式とその次の夏島式がある。また、遺跡からは当該期と思われる陥穴(落し穴)が1基検出されている。

井草式

夏島式

神山谷遺跡

神山谷遺跡では、台地の先端部を中心に早期の遺構・遺物が多数検出され、大きな成果が得られた。住居跡・陥穴・炉穴は前ページ載せている。遺物では撚糸文系、沈線文系、条痕文系とあり、特に早期終末期の土器は特筆する。また、同期と思われる石器(石斧)も出土している。

撚糸文系土器(夏島式)

沈線文系土器(田戸下・上層式)

条痕文系土器(茅山式)

条痕文系土器(茅山式)

条痕文系土器

早期の石斧

城山遺跡

城山遺跡は、台地上から撚糸文・沈線文土器が出土したが、東側斜面で撚糸文系最後の花輪台式の地域型式土器群が多数出土し、注目された。それは縄文施文と無文、尖底と平底とが入り交じり、複雑な土器群である。

花輪台式土器群の出土状況

花輪台式土器

花輪台式土器

その他早期の土器

前期

前期では神山谷遺跡と新台遺跡とで、住居跡が検出されている。町内ではそれ以外の遺跡はまだ見つかっておらず、少ない時期である。

神山谷遺跡

神山谷遺跡では、前期中葉の黒浜式期の住居跡が4軒検出され、また包含層も含めて、前期終末までの土器が多数出土した。黒浜式以外では、諸磯式、浮島式がある。

黒浜式期の住居跡

黒浜式土器

黒浜式土器

諸磯式土器

諸磯式土器

浮島式土器

浮島式土器

浮島式土器

神山谷遺跡出土の前期土器

新台遺跡

新台遺跡からは前期諸磯式期の住居跡が１軒検出され、復元可能な土器が出土した。

新台遺跡前期住居跡

住居跡出土の諸磯式土器

中期

中期になると徐々に遺跡数が増え、また規模も大きくなって集落を形作る遺跡も現れてくる。特に大総地域では中台・姥山の貝塚、東長山野の集落遺跡など、密度が高くなっている所もある。栗山川東岸でも虫生駒形をはじめ、神山谷・城山などの台地上にも、小規模ではあるが遺されている。また、この頃、低地への進出も見られ、芝崎や古屋あたりでも土器や石器が出土している。

中期初頭では城山・神山谷遺跡で五領ヶ台式があり、次いで阿玉台式になると大総地域で増大する。そのままほとんどの遺跡では末葉まで続き、後期になる時、東長山野のように一旦途切れる遺跡と、中台のように継続して営まれる遺跡とに分かれる。ここでは集落が検出された東長山野遺跡を中心に述べていくことにする。

上空から見た姥山貝塚

東長山野遺跡と大総の台地

東長山野遺跡

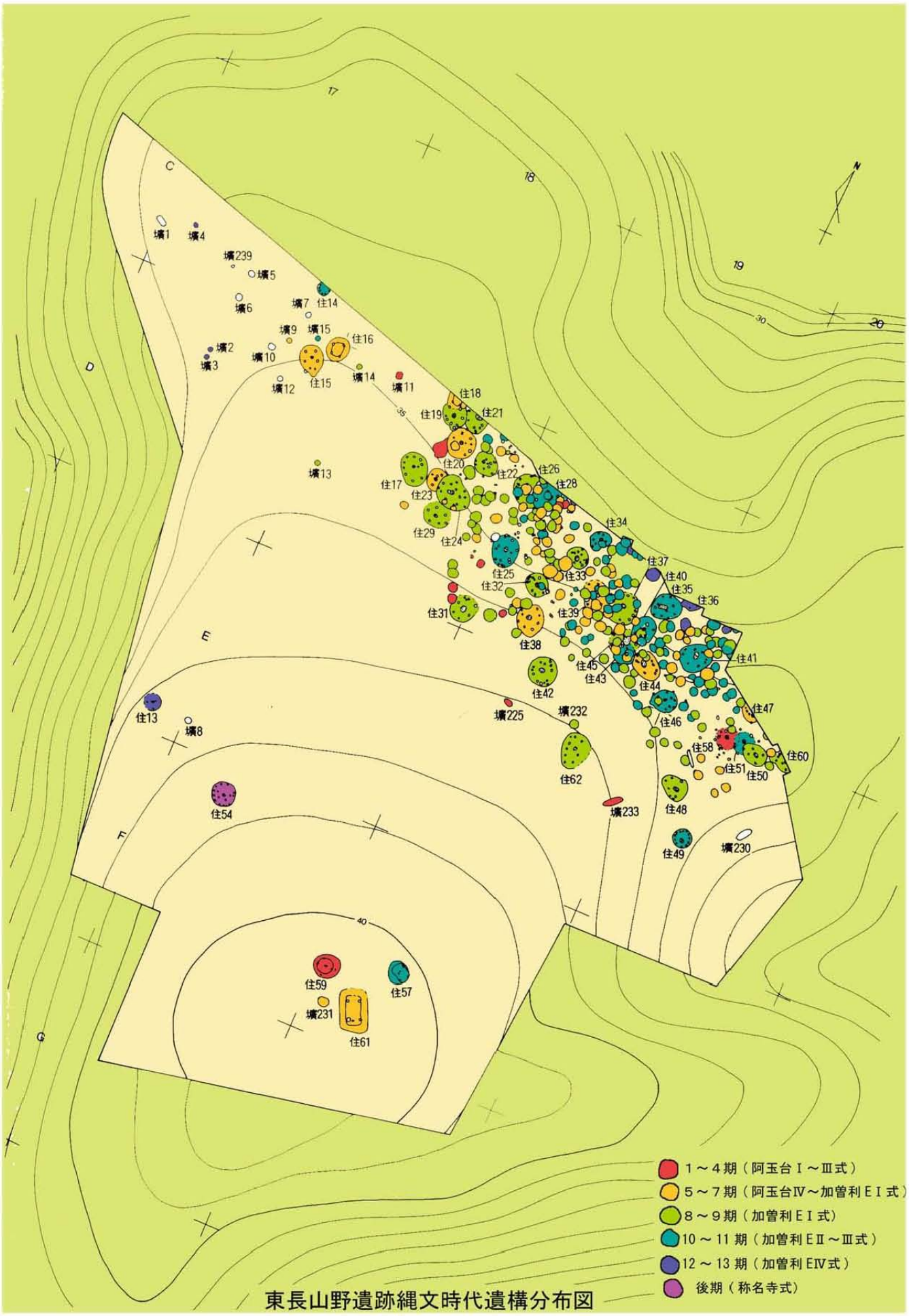
東長山野遺跡は、中台と長倉の中間あたりで、坂田池から入る小谷が北側に来て、それに突き出すように扇状となった台地上に立地する。ここでは台地が下総上位面から千葉段丘への緩い傾斜面に遺跡が展開し、集落の中心は低い千葉段丘上になる。発掘調査は昭和63年に実施され、縄文集落のほぼ半分近くが解明された。

発掘された縄文時代の住居跡は45軒、貯蔵穴は230基余、そのほか陥穴、柱穴群などなどがある。出土した土器はテン箱500箱以上、実測土器265点、土器片錘960点、石鏃130点、石斧80点、ヘラ状石器30点、そのほか土偶、ヒスイ大珠、琥珀玉、耳飾り、貝輪など、膨大な量・質の遺物がある。また、住居跡や貯蔵穴の中からは、貝殻も出土し、当時の食生活の一端を推測出来た。

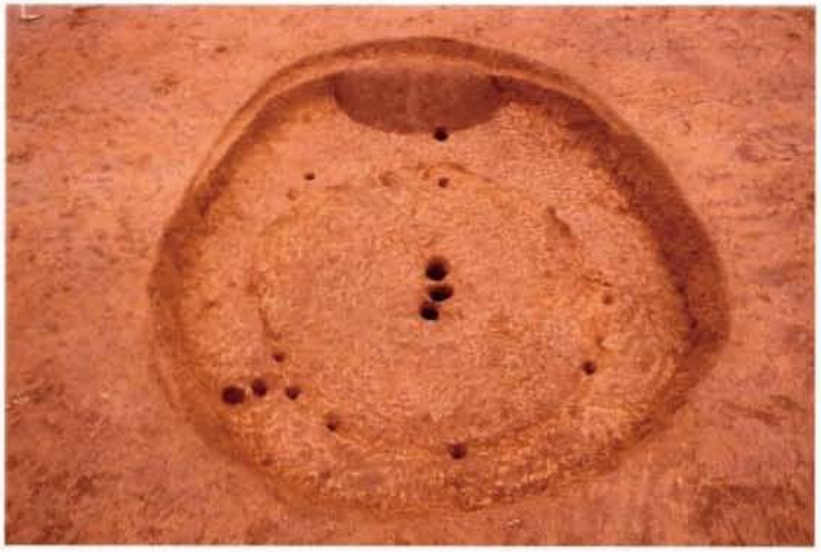
出土した土器から、東長山野遺跡は約５千年前の中期前葉から、４千年前の後期初頭まで続いた集落遺跡で、その最盛期は４千５百年前前後であったろうと推定される。そのときの集落は20軒ほど、およそ100人程度の人口はあったろう。その頃、遺跡の周辺でも、姥山や中台にも集落が営まれ、賑やかで活気に満ちた縄文社会が形成されていたことだろう。

遺跡中央部空中写真

遺跡中央部の住居跡・土壙群



東長山野遺跡縄文時代遺構分布図



２期（阿玉台Ｉｂ式）の住居跡

７期（加曽利ＥＩ式初期）の住居跡

８期（加曽利ＥＩ式）の住居跡

25 号住居跡の炉

42 号住居跡の炉

重なり合う住居跡と貯蔵穴

135 号坑を利用した埋葬土器

212 号坑から出土した貝殻

東長山野遺跡出土の土器

東長山の遺跡からは、中期だけでも膨大な量の土器が出土した。その一部を上から古い順に、ここに掲載した。

東長山野遺跡出土の石器・その他

磨製石斧

石鏃

装飾品

へら状石器

石皿

石棒断片

土器片錘

円板

後期

後期では中期後葉から続く中台貝塚以外では、遺跡が小さく分散する傾向が、この地域では見られる。後期初頭の称名寺式期では東長山野遺跡で住居跡があり、芝崎中島遺跡で炉跡が検出されている。堀之内式期になると中台貝塚や中島遺跡、三反田遺跡で住居跡などが検出されている。加曽利Ｂ式期では中台貝塚、姥山貝塚のほか、芝崎遺跡、三反田遺跡など低地での発見例が増えてくる。しかし、低地での遺跡は遺構の検出はほとんどなく、土器が単独で出土する例が多い。安行Ⅰ・Ⅱ式期になると姥山貝塚があるくらいになり、この地域の縄文文化がよりいっそう縮小傾向になって、晩期へと移っていく。

芝崎中島遺跡炉跡
（称名寺式期）

三反田遺跡炉跡
（堀之内１式期）

中台貝塚１号住居跡
（加曽利Ｂ１式期）

後期の土器

中島遺跡出土の後期土器

三反田遺跡出土の堀之内式土器

中島遺跡出土称名寺式土器

弥平野遺跡出土の加曽利B式土器

中台遺跡堀之内I式

姥山貝塚加曽利B式

中台貝塚加曽利B式

三反田遺跡加曽利B式

中台貝塚出土の土偶と土製品

晩期

晩期はほとんど姥山貝塚のみと言っていいくらいになる。そのほかでは東長山野遺跡、篠本城山遺跡でわずかに土器が出土しているのみとなる。また、姥山貝塚に近い長倉宮ノ前遺跡からは晩期最終末から、東国弥生時代初期の土器が出土し、縄文時代と弥生時代の架け橋となる資料となる。姥山貝塚でも同様な土器が見られる。下の土器は、記載以外は姥山貝塚出土である。

姥山貝塚

安行Ⅲa式

姥山式

大洞A式

荒海式（篠本城山遺跡）

晩期の土器

④貝塚文化が栄えたころ

縄文時代では、海岸の近くや関東では内陸部まで多くの貝塚が遺されました。特に千葉県の東京湾岸には、千葉市の加曽利貝塚や市川市の堀之内貝塚など、巨大な貝塚が多く分布し、貝が豊富に生息し、縄文人が多くの貝を採って食料としていた証といえます。貝塚は縄文時代のゴミ捨て場ですが、貝殻の層の下からは、縄文時代の住居跡や貯蔵穴が出てきます。また、貝殻に混じってシカやイノシシなどの動物の骨や魚の骨、人の骨、それに生活に使った土器や石器など、当時のさまざまなものが出ます。そのため貝塚は、縄文時代のタイムカプセルだともえます。

町内にも大総地区に姥山貝塚があり、県内でも太平洋側で最大の貝塚として知られ、多くの貝殻や土器などが散布しています。このほか中台、木戸台、虫生駒形にも小さな貝塚があります。また、東長山野遺跡では住居跡や貯蔵穴の中から貝殻が出土しました。東長山野遺跡から出土した貝の種類を調べてみると、ダンペイキサゴやチョウセンハマグリなど、今も採れる貝のほか、アサリやハマグリ、マガキ、サギガイ、ヤマトシジミなど、今では近くの海岸で取れなくなった貝もあり、当時は豊かな海辺が広がっていたと思われます。また、貝のほか魚の骨、シカの骨・角、鳥の骨などもあり、当時の食生活の一端を見ることができます。

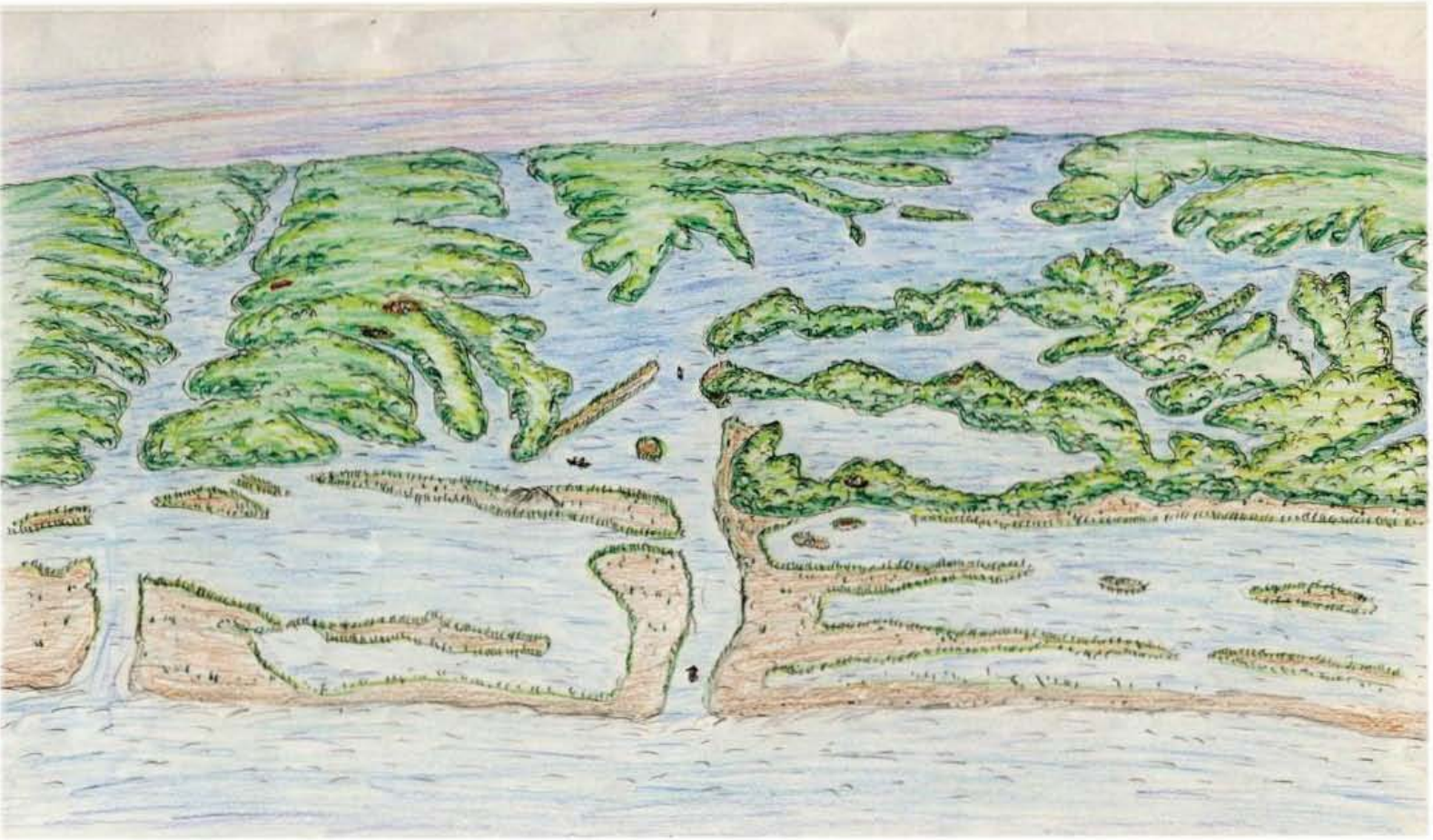
貝殻が散布する姥山貝塚

虫生駒形遺跡で検出された小貝塚

東長山野遺跡の住居跡と貯蔵穴から出土した貝殻

貝塚から出土した貝殻と魚骨

縄文時代は、旧石器時代とは打って変わって暖かな時代であったと言われ、凍っていた氷河は溶けて海水面が上昇し、氷河時代は谷底だったり、海岸段丘だった低い所は水没し、海水が内陸深くまで侵入しました。これを縄文海進と言われ、栗山川流域も海水に浸され、下の図のような、今の宮城県松島のような光景が広がっていたと想像されます。東京湾では海が栃木県南部まで入っていたことが、縄文時代の貝塚の分布で分かりました。この最も海が内陸に入っていたのは縄文時代早期の終わりころ（今から７千年前）から、前期（同6千年前）までで、その後、海水に浸っていた所や海岸部、大きな川の河口部には土砂が次第に堆積し、陸地や湿地になっていき、九十九里平野のような沖積低地が形成されました。

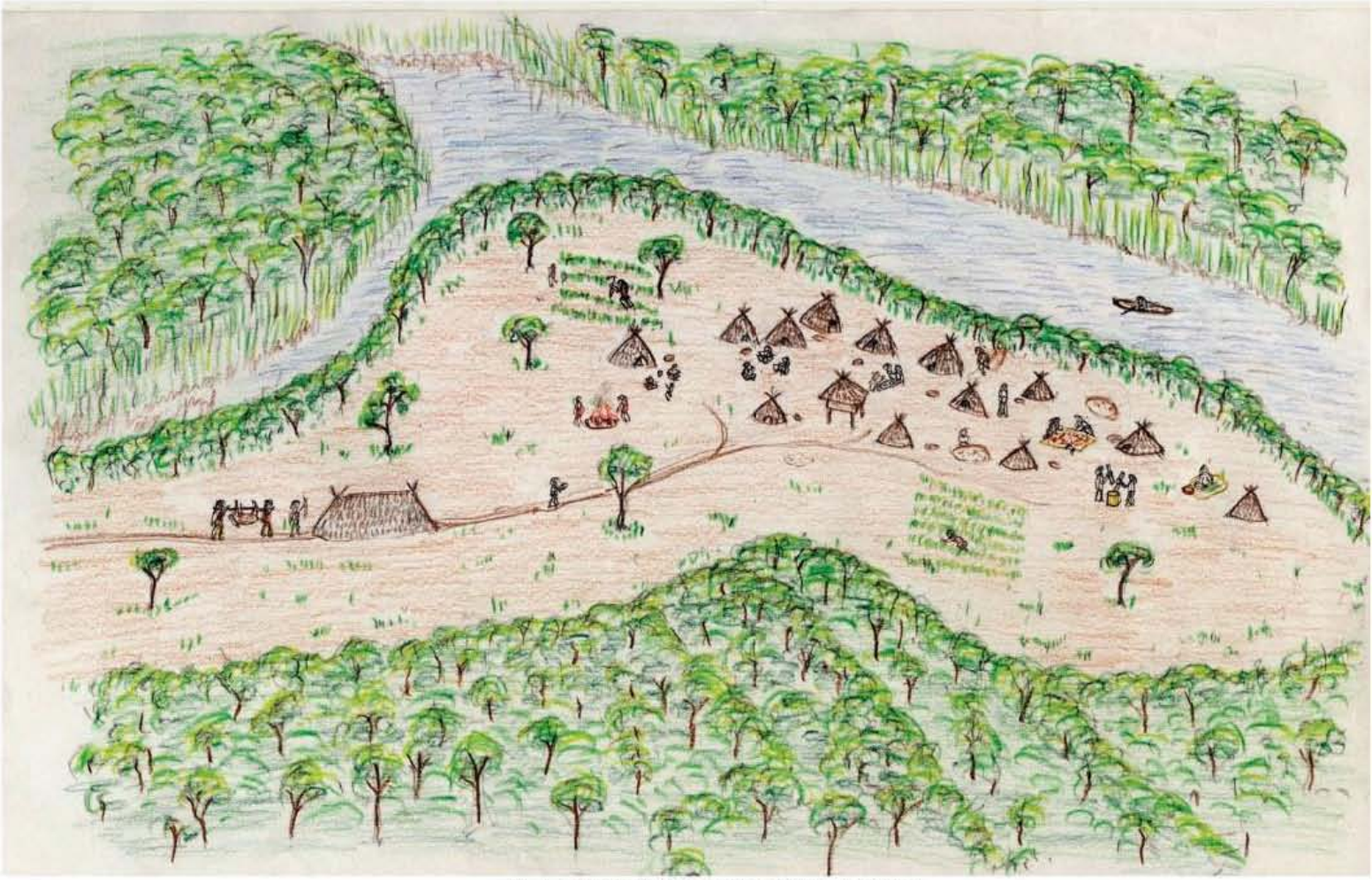


縄文時代中頃（今から5,000年前）の横芝光町の風景

⑤縄文人の生活

縄文時代の遺跡では、貝塚が残されているところから、縄文人は主に貝を食べていたと思いがちですが、それだけでなく栗やクルミ、トチなどの木の実や、ヤマイモなどから多くの炭水化物をとっていたことが、遺跡から出土したわずかな遺存物(炭化物・実殻)や、花粉分析によって分かってきました。横芝光町の隣の匝瑳市では、丸木舟とともに栗やクルミが多く出たという記録があり、縄文時代にこれらの木が多く生えていたと想像されます。縄文人はこれら木の実を主とする炭水化物、それにシカやイノシシなどの動物、魚や貝などの魚介類、それにまだ分かりませんが、フキやセリなどの野の野菜と、身の回りで採れるさまざまなものを利用したとすると、食生活は豊かであったと考えられます。

ここでは縄文人の生活を、集落が検出された東長山野遺跡を取り上げ、その復元を試みました。東長山野遺跡は16,000㎡を発掘し、縄文時代の住居跡が45軒、貯蔵穴230基が検出され、縄文中期の集落のほぼ半分を調査した。検出した住居跡などを出土した土器をもとに、13期に分類し、それをさらに5段階に色分けして示したのが27ページの図で、その第2段階を想定して当時の生活状況を復元して描いたのが下の図である。未発掘の部分は、発掘した箇所から推定したものである。それによると、当時は住居が14軒、住居の脇には貯蔵穴が掘られ、集落の周りには野菜や里芋などを作る畑があり、その外側には栽培する栗林があったろうと思われる。遺跡の北東川には、谷が入り、集落のすぐ下に湧水があって、飲料水や木の実のアク抜きの水場があったと想定される。



東長山野遺跡７期の復元集落図

東長山野遺跡７期 15・16 号住居跡の復元模型

クリ

マテバシイ

スダジイ

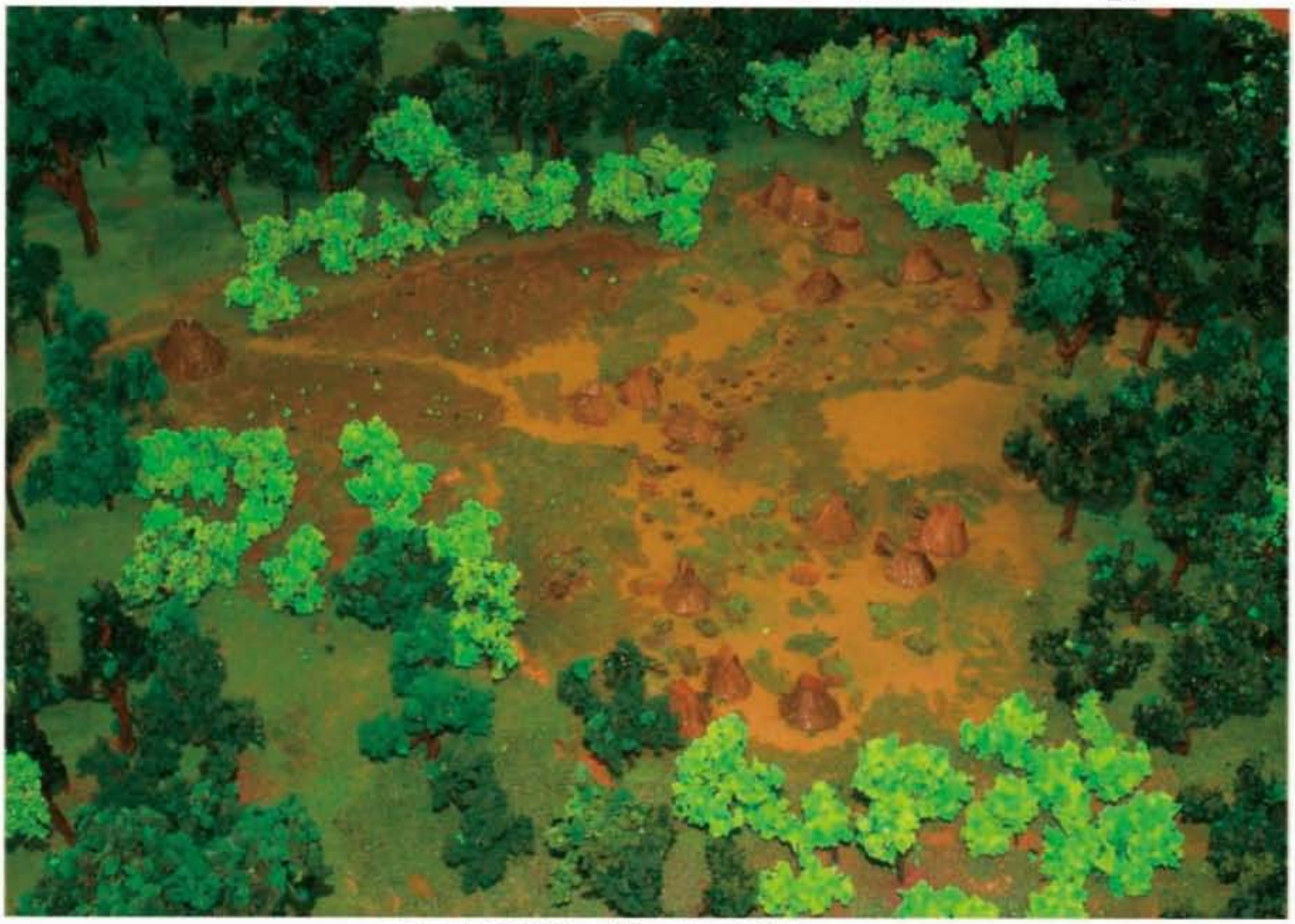
カヤ

トチ

オニグルミ

ヒシ

下の写真は東長山野遺跡７期の復元ジオラマである。復元図とは多少異なるが、これでは明るい色の林が栗林で、その周りの濃い色は自然の照葉樹の森で、縄文の森を再現した。この照葉樹の森には、スダジイや椿のほか、栃や鬼胡桃などの落葉樹も生え、縄文人の重要な食料となっていた。



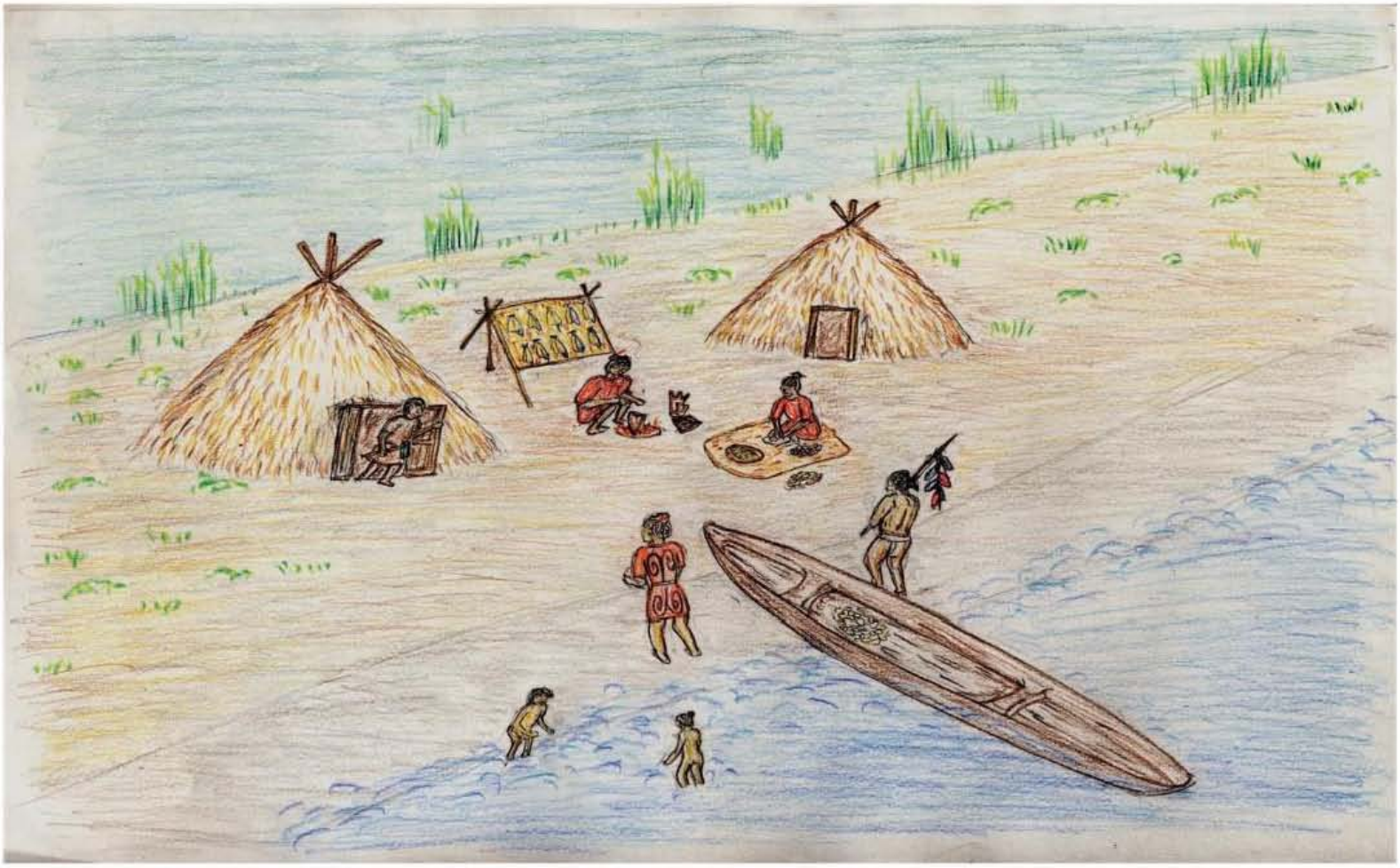
東長山野遺跡７期の復元ジオラマ

⑥低地に進出した縄文人

縄文時代の中ごろ近くになると、海水で浸されていた低地に砂浜や砂州などの陸地ができ、そうした海に近い所に縄文人は進出していきました。砂州上の遺跡である芝崎の中島遺跡や国道沿いの三反田遺跡からは中期から後期初頭の土器が多数出土し、また炉(いろり)の跡も見つかり、ここで生活していたことがわかりました。また、低地の中でも葦や水草が腐らずに堆積した泥炭層からは、独木舟(丸木舟)が出土することがあります。本町から隣接の多古町、匝瑳市は全国的に、最も多くの独木舟が出土した地域として知られ、これまでに32艘見つかっています。町内でも栗山川流域で９艘出ていて、高谷川低地遺跡では独木舟とともに、櫂や櫛も出土しています。

芝崎遺跡の後期竪穴

多古町志摩で出土した独木舟
（写真　多古町教育委員会提供）



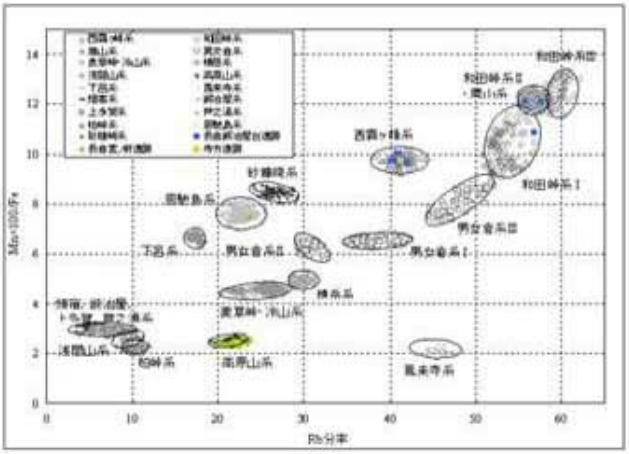
縄文時代浜辺の生活

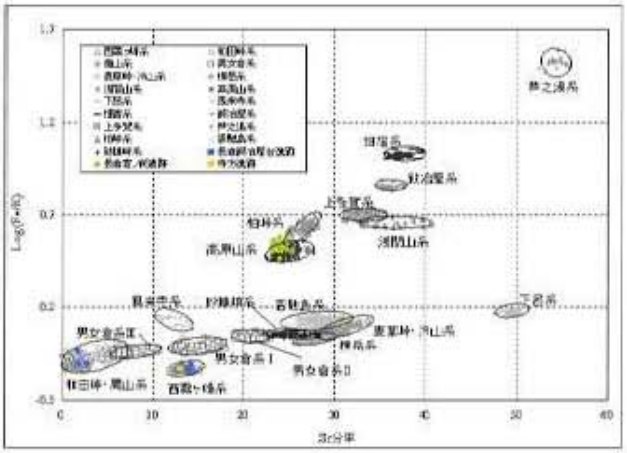
⑦黒曜石の産地分析

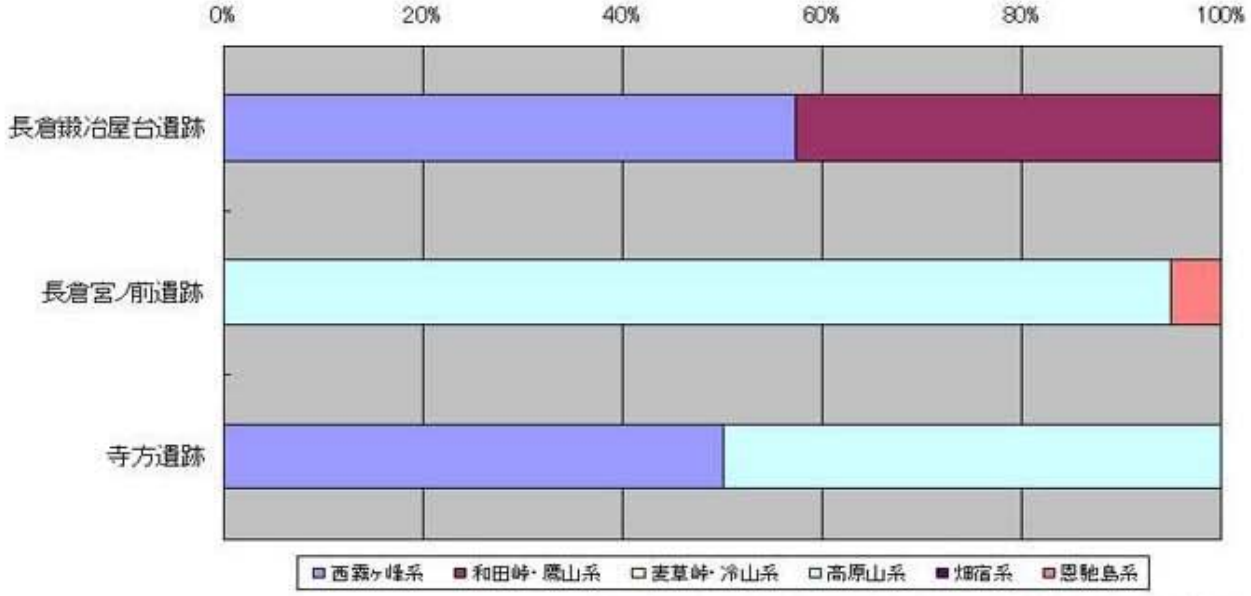
町内の旧石器・縄文時代遺跡からは、石器に使われた黒曜石が多く出土している。黒曜石はもともと火山から噴出した溶岩が、周りの岩石と接触して急速に固まったものでの、そのため黒曜石は噴出した火山によって成分が異なる。そこで今日ではこの黒曜石の成分を分析して、その産地を推定することが可能となった。

町では明治大学古文化財研究所の協力を得て、町内出土の黒曜石を分析して、その産地を突き止めることが出来た。

旧石器時代では、鍛冶屋台遺跡・宮ノ前遺跡・寺方遺跡から出土した黒曜石計30点、縄文時代では東長山野遺跡・城山遺跡から出土した黒曜石を分析した。



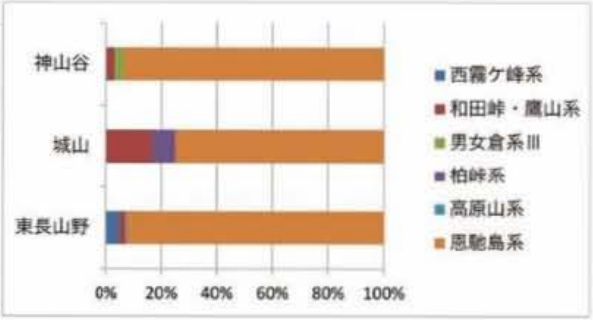




杉原他（2011）黒曜石製遺物の原産地推定より抜粋

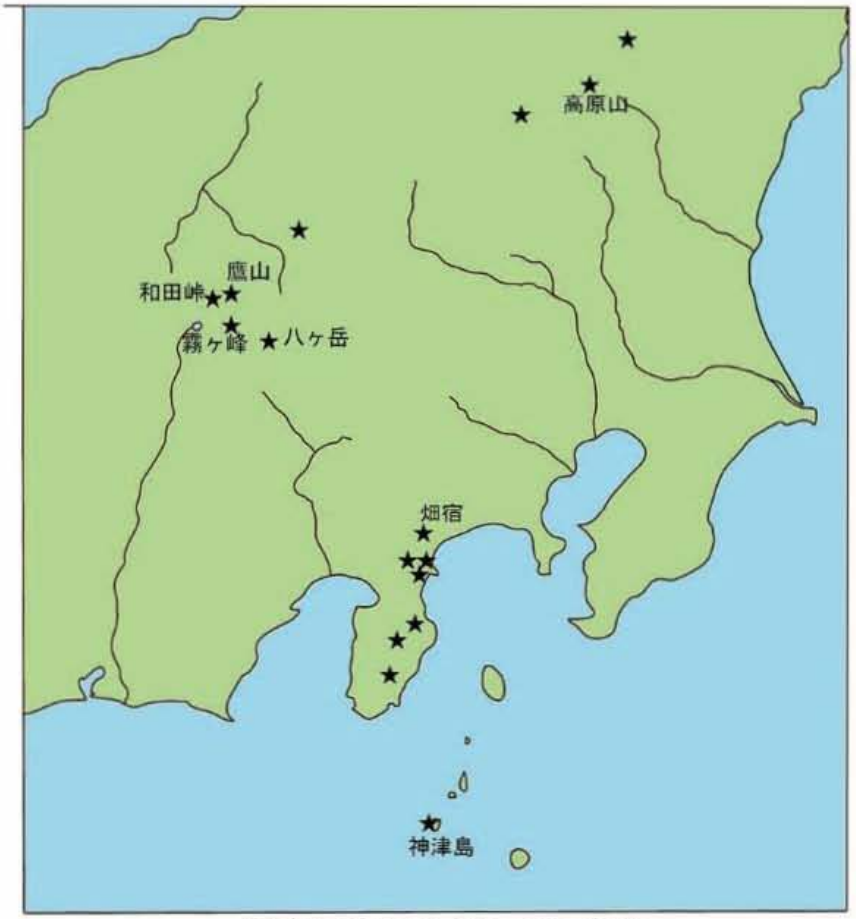
分析の結果、旧石器時代では上の図のように、３遺跡でそれぞれ構成が異なり、鍛冶屋台では長野の霧が峰・和田峠、宮ノ前では栃木の高原山、伊豆の神津島、寺方では霧ケ峰・高原山であった。このように旧石器時代で、すでに様々な所の黒曜石を集めて使っていたことが判明した。

遺跡名	東長山野	城山	神山谷
測定点数	164	14	35
判別点数	141	12	31
西霧ケ峰系	7		
和田峠・鷹山系	3	2	1
男女倉系Ⅲ			1
柏峠系		1	
高原山系	1		
恩馳島系	130	9	29
判別不可	23	2	4



縄文時代黒曜石の分析結果

縄文時代になると、黒曜石産地は伊豆神津島近くの恩馳島産が多くなり、特に東長山野遺跡では、分析した黒曜石 164 点で、判別できた 141 点中、実に 95%以上の 130 点が恩馳島のものであった。神津島と言えば伊豆半島の先端から 50km 以上も離れた孤島で、縄文時代でさえ舟で渡らなければならなかった。今でもよほどの航海術がなければそれを行けない海を、当時はどのように渡っていったのであろうか。また、海を渡る危険を冒してまで、黒曜石を必要としたのは何であったろうか。



関東周辺の主な黒曜石産地

参考文献
(財) 千葉県文化財センター(1986) 主要地方道成田松尾線Ⅲ
(財) 千葉県文化財センター(1987) 主要地方道成田松尾線Ⅴ
(財) 千葉県文化財センター(1989) 横芝町山武姥山貝塚確認調査報告書
北長山野遺跡調査会(1990) 東・北長山野遺跡
千葉県(2000) 千葉県の歴史　資料編　考古1(旧石器・縄文時代)
(財) 東総文化財センター(2000) 篠本城跡・城山遺跡
(財) 東総文化財センター(2000) 夏台遺跡
(財) 東総文化財センター(2002) 神山谷遺跡
(財) 東総文化財センター(2002) 新台遺跡
(財) 東総文化財センター(2006) 傍示戸遺跡
(財) 東総文化財センター(2006) 芝崎遺跡群
(財) 山武郡市文化財センター(2006) 寺方古墳群
(財) 山武郡市文化財センター(2007) 長倉宮ノ前遺跡
(財) 山武郡市文化財センター(2006) 長倉鍛冶屋台遺跡

協力
本企画展開催に当たり、展示遺跡のジオラマ制作に横芝光町ふるさと歴史ロマン研究会に協力をお願いしました。その名を記し、御礼申し上げます。
西山太郎、市原勝、伊藤公男、実川恵美子、鈴木範子、池田勝子、高久昌子、吉岡元子、小椋幸枝、樋口広三、野村俊二、福元省蔵、池田逸子、布施隆吉、瀬利清志

平成24年企画展
考古資料で見る横芝光町の歴史1
—旧石器・縄文時代—

発行日　平成24年9月15日
編集・発行　横芝光町教育委員会
印刷　三陽メディア株式会社